

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 1 LESSON 8 授業例①

S.N. 先生

指導計画表

(全8時間)

時間	学習内容・主な活動
1	■とびら・プレ活動 ■GET ・ウォームアップ ・文法導入 Part1・2 (肯定文, 否定文, 疑問文)
2	■GET Part 1 ・ウォームアップ ・語句導入 ・本文導入・理解 ・コミュニケーション活動
3	■GET Part 2 ・ウォームアップ ・語句導入 ・本文導入・理解 ・コミュニケーション活動
4~5	■USE Read ・ウォームアップ ・本文導入・理解
6~7	■USE Mini-project ・ウォームアップ ・ホームページを作ろう ■まとめ 文法の要点
(■We're Talking 8 ・ウォームアップ ・語句導入 ・本文導入・理解 ・コミュニケーション活動

実践例

1. 大切にしたいニュアンス

まず、明記しておきたいことは、*NEW CROWN* は、学習者にとって学びやすいスコープとシーケンスになっています。特に紙面において、GET のパートでは、見開きページを全て学習することによって、新出の文構造（文法）についてバランスよく4技能を学ぶことができるように構成されています。また、USE Read のパートにおいては、新出語彙が豊富かつ文章量もしっかりあるので、読む力を確実に深化することができ、Mini-project では、1つのテーマに沿って、それぞれの技能を総合的に駆使できるように設問され、最終的に、4技能の統合が自然と行えるようになっていきます。つまり、*NEW CROWN* を使用して、偏りなく丁寧に指導することができれば、学習指導要領はもちろんのこと実際に活用できる生きた英語が身につけられます。その点において、*NEW CROWN* は、非常に秀逸な教科書といえます。したがって *NEW CROWN* をいかに丁寧に順序立てて使用し、学習者の実態に応じてワークシートなどを使用すれば、それでいいと思います。しかし、それでは今回の実践事例集の趣旨に沿いませんので、L8 において私が実践したことを紹介させていただきます。

まず英語の指導において、大切にしていることの一つに、学習者が表現したい英文が、正しくネイティブに伝わっているか、つまり、表現したいこと（伝えたいこと）を表現した英文に、ネイティブの誤解を招くようなニュアンスが生まれていないかということです。一例を挙げると、do not の短縮形は don't ですが、その両者が意味合いにおいてイコールの関係にあるように指導されていたり、市販のワークブックなどで、do not を don't に機械的に言い換えさせたりする問題に出くわすことがあります。I do not play kendo. と I don't play kendo. では、同じ否定文でもニュアンスが違ってきます。前者は、「私は剣道をやらないんだ！」と、わざと「しない」を強調したように感じる一方、後者は、「私は剣道をしません。」という響きになります。「疑問文や

否定文の場合、some ではなく、any を使う」という指導を聞いたことがあります。しかし、実際は、疑問文でも any ではなく、some を使うことがあります。人に何かをすすめるとき、ネイティブは相手が Yes と答えるのを期待して（Yes と答えやすくするために）some を用いることがあります。中学段階（英語学習初期）において、なるべくパターン化して、教えたほうがわかりやすい、効率がよいということが念頭にあるかもしれませんが、ネイティブはしっかりと使い分けていますし、むしろ学習の初期段階だからこそのようなニュアンスの違いを大切に、意識して日々の授業で指導する必要があると思います。そうすることによって生徒の表現したいことが、よりの確に伝わる英語になります。

2. 肯定文、否定文、疑問文を同時に文法導入

L8 までに、be 動詞、一般動詞をはじめとした文の基本的な構造（肯定文、否定文、疑問文）を学習しています。

現在進行形は、既習の語彙（be 動詞、一般動詞）の組み合わせで構成することができます。また、肯定文、疑問文では、be 動詞の直後に not を、疑問文は、文頭に be 動詞を置くという既習の文法を活用することができます。例えば、ピクチャーカードを用いて、オーラルで文法導入を行った際、漠然と現在進行形とはこのような形だと感じていたことが、既習の文法を振り返ることによって、現在進行形の否定文や疑問文をより効果的に理解できます。既習文法が活用できるときは、できる限り肯定文、否定文、疑問文をひとまとまりとして指導することで、コミュニケーション活動のバラエティが増え、総合的な活動が可能になります。換言すれば、コミュニケーション活動は、肯定文だけ、否定文だけ、疑問文だけというように切り離されたものではなく、肯定文、否定文、疑問文全てを活用して行うほうが総合的かつ効果的であるために、ひとまとまりに学習することは効率的です。現在進行形にとどまらず、これは助動詞の学習でも同じことが言えます。

3. できるかぎり「気づき」のある 発音指導

「1. 大切にしたいニュアンス」の冒頭で述べたように、NEW CROWNは、教えるべきこと、教えたいことが効果的に盛り込まれ構成されています。従って、GETの見開きページを丁寧に指導すると4技能を総合的に学ぶことができます。GETの見開きページ右側のPracticeのSpeakでは、新出文法を活用した話すことの設定が用意されています。ここで大切なことは、いかに優れたSpeakの設定でも発音がむちゃくちゃであれば、十分に設定を活かしたことになるということです。教師は、生徒の発音のチェックを一番身近に行える存在であるということです。発音指導について、心がけたいことは、NEW CROWNの執筆者の一人である田邊祐司先生を参照したいと思います。田邊先生は、Morleyの言葉を引用して、「発音指導において、教師が『教え込む』のではなく、学習者が『自ら学ぶ』アプローチの重要性」を強調しています。田邊先生は、従来の伝統的なアプローチ（①直観・模倣的な手法、②分析・言語的手法）とこれらのアプローチに付随する技術指導（例：listen-and-repeat, 口腔図など）を適宜組み合わせた従来の指導法には限界があると指摘しています。田邊先生は、指導の一例として、英語母語話者の発音と日本語になっている英語（外来語）の発音を比較し、生徒に話し合いをさせることによって、その発音の規則性や発音の仕方に気づかせる手法を提示しています。

後述するUSE Readについて、協同学習を取り入れた指導法を紹介しますが、多くの場面で、教師が教え込むより、生徒同士が協同しながら気づき学ぶ合うほうが、記憶の定着は高いと感じます。ただ全ての発音指導の場面において、話し合いで、気づき発見させる指導ができるかといえば、なかなか難しいのも現実です。まず、時間的に難しいです。教師は、「ここは大切、外したくない」と思うところを抽出して、毎時間の発音（音読）指導の時に田邊先生が提示したような方法を用いることが重要だと思えます。また、NEW CROWNは、SOUNDSというコーナーを設けています。平素の授業において、必ずしも系統的に指導できない発音（音読）指導も

このコーナーをしっかりと活用することで効率的に系統的に学習することができます。それを踏まえて、L8では、本文の音読指導は、3分間の本文CDのモデルリーディングを聞きながら、テキストに本文の強勢やイントネーションをチェックさせます。そして、15分間、教師の後に続けて本文を読ませるChorus Reading, CDを聞くときは本文を見せながら音読し、繰り返すときは正確な英文の復元を心がけさせながら顔を上げて音読させるRead and Look up, Buzz Readingをして、個人で本文を2回読ませます。読ませる間は、机間指導を行い、発音のチェック、強勢、イントネーションなどの指導を個別でしていきます。

4. できるだけ頭だけでなく、 体を使った言語活動を考える

【ジェスチャーゲーム】

グループの一人は、あらかじめ用意した例文の中から一つを選び、同じグループの生徒の前で、その動作を演じ、何をしているか、現在進行形を使って答えさせます。

S1: What are you doing now?
S2: (Gesture)
S1: You're cooking in the kitchen.
S2: Right!

というようにすぐに当たるものもあれば、

S1: What are you doing now?
S2: (Gesture)
S1: You're playing baseball.
S2: No. I'm not playing baseball.
S3: You're playing softball.
S2: Yes! I'm playing softball!

というようにちよつといじわるな表現しづらい例文を入れておくと盛り上がります。いろいろな動作を表現できるようにたくさん例文を用意します。

5. 協同学習を活用したUSE Readの取組

LESSON 7以降の各レッスンにUSE Readが新設されています。協同学習の視点を取り入れています。生徒にとっては、新出語彙や文章量が多く、しっか

りと内容を理解することが困難な場合があります。一人で取り組むよりは、仲間と取り組むことにより励みになったり、理解が容易になったりします。原則は、英語の授業時間だけ分かれるグループより生活班が望ましいと思います。道徳をはじめ学活など生活班で活動することが多く、また、グループ活動を取り入れている他教科の先生に聞いてみると多くが生活班で活動をしています。本校は、生活班が4名1班になっていますが、学校によっては、生活班が5~6名で1班のところがあるかもしれません（前任校では、5~6名の生活班でした）。4~6名のグループであれば、問題はないかと思えます。班の人数が、それ以下やそれ以上では、協同しづらいと予想されます。Readは、既習文型（文法）のみで構成されているため、「読む力」の育成に集中することができます。班活動において、塾などで予習している生徒だけがリードしていくのではなく、英語の得意、不得意があるにしても同じ土俵で取り組むことができる点は、Readが既習文型（文法）で構成し洗練された文章だからだと思えます。

【USE Read 指導の流れ】

- (1) Pre-Reading を生徒に読み聞かせ、グループで、リサから送られてきたメールと写真を見て、どのような英文内容か想像させます。
- (2) 各自、英文を黙読させ、読み方や意味のわからない単語に、波線を引くように指示する。
- (3) グループ内で、それぞれが引いた波線の部分をシェアして、仲間同士でわかるところは教え合います。
- (4) 教え合いをした後でも、まだわからない波線の部分は手分けをして、調べます。
- (5) 本文の内容を英語ノートにまとめます。この段階で、In-Reading を答えるように指示します。
- (6) 全てのグループが、本文の内容をまとめ、In-Reading を答え終えるのを確認したら、クラ

ス全体で本文の内容や In-Reading の答えを確認します。USE Read では、本文を確認する際、細部にこだわった訳を確認するというよりは、概要をつかむ程度にとどめ、文章に書かれた情報を理解し、この文章の主題は何か、ということに力点を置きます。細部にこだわった訳は、授業の終わりにハンドアウトにして配付します。

- (7) Post-Reading や Try は、文章に書かれた情報や主題を整理し、表現する場として活用します。

学習指導要領の改訂に伴い、平成24年度版より NEW CROWN では英語の読む力を養うために USE Read が設けられました。新設された当時は、様々な研究会に参加しても多くの先生方がこの USE Read の取り扱いについてどのようにしたらいいのか頭をひねられていました。あれから3年が経過して、いろいろな実践が行われています。そして、そのどれもが意味あるものだと思います。大切なことは、限られた授業時間の中で、いかに効果的に読む力を養うかということだと思います。そのためには、文章量が多い USE Read を枝葉末節にこだわり取り扱うのではなく、文章に書かれた情報をいかに素早く読み取り、その文章に込められた主題は何かを正確に理解することが重要です。その効果的な方法として、仲間と共に問題解決をしようとする態度を維持していく、生活班を活用した協同学習が有効であると考えています。